

エッセイ

還暦を過ぎた旅と小さな出会い 第2回

NPO 法人「社会総合研究所」会員

桜井 良

3. ドイツ鉄道旅

2015 年 7 月から 8 月にかけて、妻と双子の孫娘（当時、小学 4 年生）を連れて 3 週間のドイツ鉄道の旅に出かけた。フランクフルトを起点に、マインツ、ビンゲン、ケルン、ハンブルグ、リューベック、ベルリン、ドレスデン、ワイマール、ハイデルベルグと時計方向に旅した。

7 月と 8 月は、シリアからヨーロッパ、特にドイツへ大量の難民が押し寄せ、世界的な問題となった夏でもある。ベルリンからドレスデンに向かう私たちが乗った列車からは、ウィーン経由でベルリン方向に進む難民を何度も見かけた。そのことが、社会総合研究所が 3 年後の 2018 年 3 月に「難民問題を考える」（柳瀬房子氏 「AAR ジャパン難民を助ける会」会長）、4 年後の 2019 年 5 月に「ドイツにおける移民／難民との共生 -今後の日本に向けた視座-」（錦田愛子氏 慶應義塾大学法学部政治学科准教授）の講演を開催する遠因となった。

リューベックにて

バルト海に面するリューベックは、日本からの旅行者はあまり行かない小さな港町。しかしここは、10 代後半の私の人生に少なからぬ影響を与えた短編小説「トニオ・クレエゲル」（トオマス・マン作 実吉捷郎訳 岩波文庫）の舞台であり、マン兄弟記念館がある。ぜひとも訪れたかった町のひとつだった。

ハンブルグから北東に列車で 40 分に位置するリューベックの駅舎に降り立ち、運河沿いにタクシーを走らせると、静かな旧市街に入る。リューベックはハンザ同盟で栄え、バルト海に注ぐトラヴェ川が旧市街を囲む運河の町でもある。玄関となるホルステン門は 1464 年～1478 年にかけて建設されたが、その重量で弱い地盤にのめり込み、傾いている。

「トニオ・クレエゲル」の主人公トニオがよく散歩したマルクト広場では、音楽祭が開催されていた。出番が終わった女性シンガーや地元のお年寄りに誘われ、テーブルを囲んで無料で提供されたビールを飲んだ。



旧市街へ入るホルステン門。重みで傾いているのが分かる。夏休みを利用してドイツ各地を自転車旅行中のドイツ人家族と孫娘のスナップ写真。

トオマス・マンがよく食事をした市庁舎地下のレストラン「ラーツケラー」。マンの写真や資料で飾られたボックス席で、マンも好物だったという魚料理の昼食を取った。



ビンゲン市の SGI ビィラ・ザクセン会館を訪問

私が 23 歳の 1971 年秋、就職した X 社のイギリス系親会社の工場があるデュッセルドルフで研修を受けた。休日には研修の面倒を看てくれたドイツ人青年に連れられ、ライン河下りをしたことを思い出す。コブレンツで飲んだモーゼル・ワインは美味しかった。

ライン河でもっとも風光明媚な場所は、ローレライ（ただの岩山）ではなく、マインツのやや下流にあるビンゲンの丘からみた風景であると言われている。ドイツの文豪ゲーテが、ここから見るライン河が最も美しいと褒め称えた場所を記念する「ゲーテの休憩所(GOETHE-RUHE)」はここにある。

私は再びライン河を楽しみたいと考え、ビンゲンを訪れた。そこには、ドイツ SGI (Soka Gakkai International : 創価学会インタナショナル) のヴィラ・ザクセン (Villa Sachsen 「ザクセンの山荘」) 総合文化センターがある。センターの眼前にはライン河が流れ、対岸にはワインの名産地として知られるリュードスハイムの葡萄畑の丘陵が広がり、背後の丘には「ゲーテの休憩所」もあった。



ゲーテがこの丘からのライン河が最も美しいと愛でた「ゲーテの休憩所」。

「ゲーテの休憩所」近くの丘からライン河を望む。



家族で総合文化センターを訪問した日は、近くの学校の先生方の研修所として活用されていた。受付にあったパンフレットを見ると、ほぼ毎週末にコンサート、展示会、合唱祭、セミナーなど、地域住民の交流や活動場所として利用されていることに驚く。ドイツでは、9月の第2日曜日は「歴史的建造物公開の日」として定められ、さらにビンゲンでは9月上旬にワイン祭が開かれるので、この期間は、ヴィラ・ザクセンもオープンデーとして開放されている。



音楽祭の様子。ヴィ
ラ・ザクセンのパンフ
レットから。

ところで、この地にヴィラ・ザクセンが建てられたのは 1843 年、ザクセン王フリードリヒ・アウグスト 2 世の時代である。長い間、貴族の屋敷として愛されてきたが、やがてビンゲン市の管理に置かれた。1995 年、この山荘が競売に出されたのでドイツ SGI が購入し、修復を重ね、1997 年に開館した。しかし、そこに至るまでには多少の波乱があったようである。

競売に出されたとき、別荘として計画した大金持ちやホテル建設を目論む観光業者に混じって、ドイツ SGI も宗教施設として活用するために入札に応募した。しかし、SGI の提示価格は最安値であり、他の入札者に渡る可能性が高かった。そのとき、ヴィラ・ザクセンの背後の丘陵に位置するカソリックの教会 Chapel of St. Roch と修道院 Oblatenkloster St. Rupert の僧院主が、当時のビンゲン市長に手紙を出した。SGI は世界平和に真剣に取り組んでいる仏教徒の団体で、ドイツ国内で文化の醸成やさまざまな団体との友好活動を築いてきた。また、風光明媚なライン河の景観を保全し、市民友好の文化センターとして活用する計画ももっている。別荘やホテルとするよりも SGI にヴィラ・ザクセンを譲るべきであると。これが功を奏して、SGI への譲渡がビンゲン市議会で可決されたのである。その後、ドイツ国内から数多くの SGI 会員がヴィラ・ザクセンに集まり、ボランティアで修復に汗をかき、2 年後に開館した。

ヴィラ・ザクセンが地域友好の場として開放されているのは、こうしたビンゲン市に対する感謝の気持ちを表している。宗教施設が地域住民にオープンに活用され、愛されるようになってこそ、その宗教が社会で信頼を得ていく。そのひとつの見本を見た気がした。そしてカソリックが SGI を正當に評価してくれたことも嬉しかった。互いに歴史も教義も異なるが、平和や友好を目指すという点では、願いは同じだ。

後年、ビンゲン市はドイツ SGI に感謝を表すため、ライン河畔の公園に歌碑「花に花を重ねて」(Bluten uber Blumen)を建立し、報いた。「花に花を重ねて」は、池田 SGI 会長が歌った詩をドイツ語に訳したものである。私たちが訪問したときは、市民の憩いの場として親しまれていた。



ライン河畔にある公園。ビンゲン市が寄贈した池田 SGI 会長の詩「花に花を重ねて」の歌碑にて。周囲には数多くの桜が植樹され、満開のときはたくさんの市民が集う憩いの場所となっている。

ヴィラ・ザクセンを訪問した後、私たちはビンゲンの船着き場からザンクト・ゴアー (St. Goar) までライン河下りを楽しんだ後、列車でマインツに戻った。

ワイマールの広場で出会ったバキスタンからの移民の家族

ドイツ鉄道の旅で「もっとも好きな町はどこか？」と問われれば、私はワイマールと答えたい。ワイマールはドイツのほぼ中央に位置し、人口 6 万 5 千の小さな町。快晴の 8 月 6 日、ドレスデンからライプツヒヒを経由し、のどかなワイマールの駅舎に降り立った。駅前広場の前に老舗ホテルのカイザリン・アウグスタがある。私の好きな作家トオマス・マンも宿泊したことがあり、ロビーにはマンの宿泊時の写真が掲げてあった。

ホテル 3 階の部屋のベランダから遠くを見渡すと、麦秋に満ちたなだらかな丘陵が町を囲み、あちこちに教会の尖塔が見える。視線を南に向けると「大公家の墓所」の緑豊かな並木道が望める。この墓所にゲーテやシラーが眠っている。夏の遅い陽が沈み、夜の帳が降りるまで、飽きずに丘陵地帯を眺めた。

翌日も快晴。「大公家の墓所」に赴き、ゲーテ家の墓に花を手向けた。近くには、ゲーテが終生愛したといわれるシャルロッテの墓もある。この墓所の近くに作曲家にしてピアノ演奏家のリストの家があり、訪れてみた。公園を隔てた隣には、近代デザインを作り出したバウハウス大学があり、夏休みにもかかわらず、多くの学生を見かけた。ゲーテの家、シラーの家、そしてゲーテとシラーが腕を組んでいる有名な像のある国民劇場などを見学した。街中に花が咲き乱れ、静かで、それでいて活力がある。建物も時代と気品を感じさせる。ゲーテやシラーが愛した町であったことがうなずける。

少し歩き疲れたので、市庁舎広場に面したアイスクリーム屋さんに立ち寄った。日差しを避けるために広場に突き出すように張られたキャノピーの下、家族 4 人でアイス进行していると、隣の席でやはりアイスを食べていた若い親子に、「日本から来たのですか？」と話しかけられた。「そうです」と返事すると、大阪に友達がいるという。

小さな双子の孫娘を連れて旅行していると、見ず知らずの人から話しかけられることがたびたびある。そして、普段ならしないような会話をする場合もある。たぶん、孫を連れていて相手の警戒心がほぐれるのだろう。このときもそうだった。

急ぐ旅でもないので、アイスを食べながら小1時間ほど雑談した。ご主人は、15年前に両親に連れられて来たパキスタンからの移民。ドイツ語と会計を学び、現在はバウハウス大学の職員として仕事をしているという。そして数年前にドイツ人女性と結婚し、子どもに恵まれた。現在はすっかりドイツに溶け込んでいるが、それまではたくさんの苦勞をしたという。ドイツは、決して理想の国ではなかったし、いじめもあった。しかし、父親からは、「受け入れてくれたドイツ人の習慣に従え」「衝突したときには移民してきた側が歩み寄れ」「ドイツへの感謝の気持ちを持ち続けよ」と、子どもの頃から常に言われてきたという。家ではパキスタン語（ウルドゥー語）を喋っても外ではドイツ語を話し、強い香辛料を使った故郷の料理を作るときは、臭いが外に漏れないように窓を閉め切ったという。



アイスクリーム屋さんで知り合った若夫婦。安住の地と家族をもった笑顔がすがすがしい、と思うのは、私の考えすぎか？ 中央のふたりの女の子は、我家の双子。左下で座ってアイスを食べているのは、若夫婦の2歳になる女の子。

移民した国には、言葉の壁だけでなく、異なる文化・宗教・生活習慣がある。移民が、それは嫌いだ、溶け込めない、といった態度を取り続け、自分たちだけのコミュニティーを造って閉じこもれば、やがて先住民との間に摩擦が生じ、緊張が生まれる。その行先は移民の排除だ。移民は、なによりも受け入れてくれた社会を受容し、その社会に溶け込もうとする姿勢が大事だと思う。そのためには、言語や習慣を学び、仕事に必要な知識・経験を積み重ねる努力が、ぜひとも必要である。その意味で、彼の父親の言ったことは、正しいと思う。ワイマールで出会った家族は、よき「市民」となる努力をしてきたのだと思う。

ベトナム出身の新入社員 W さんのこと

ここまで書いて、あるひとりの青年を思い出した。ベトナム出身の W さんだ。

私は30歳代の半ば、つまり1980年代の初め頃、X社で技術系新入社員の研修を担当したことがあった。4月入社から配属先が決まる7月まで、神奈川県西部の丘陵地帯にある研修所で、新入社員と一緒に寝食を共にしながら過ごすのである。X社は毎年、東南アジア出身者を数人、採用していた。

Wさんは、1983年の新入社員だった。ベトナム戦争中の1971年、留学生として日本の大学に入学。母国に婚約した女性を残して。しかし、1975年4月にサイゴンが陥落し、国中が混乱する中、Wさんは母国に戻れなくなってしまった。女性にも出国許可が下りなかった。やがて音信が途絶えた。W

さんは、いつかは祖国に戻る夢を抱きながら X 社に入社。日本での生活に根を下ろし始めた。その後、自分の名前のベトナム語発音を漢字に置き換えて日本人としての名前に変え、日本人女性と結婚し、日本国籍を得た。

彼の奥様は、町田市にベトナム料理店を開いた。私はその店に一度だけ食事に行ったことがある。やさしい奥様と、生まれた子供たちに囲まれた彼は、複雑な思いもあるのだろうが、日本人として生きる決意を語った。

韓国出身の新入社員 S さんと R さんこと

ここまで書いて、さらに 1984 年入社の方の青年、S さんと R さんを思い出した。

S さんは韓国からの留学生。入社後の数年間は日本国内で仕事を習得し、やがて韓国に戻って韓国にある X 社の子会社で仕事をする計画だった。

その S さんが、夜 10 時過ぎ、トレーナ室で翌日の準備をしていた私を訪ねてきた。深刻そうな顔をしている。彼は明日の講義開始時に、講師に対して「起立、礼、着席」の号令をクラス全員にかける当番になっているが、それができないというのである。最初、私はなぜなのか、理解できなかった。私にしてみれば、こうした号令は小中学校から続いてきた習慣であり、他の日本人の新入社員も同様であろう。理由を聞いた。すると S さんは、韓国にいる祖父から太平洋戦争中の日本軍の振る舞いを聞き知っていて、この軍隊調の号令は、どうしても出来ないというのだった。だいたい悩んだ末に、こうして夜遅く、私に相談に来たのだった。私は理解した。そして、号令をかける当番は他の研修生に変えた。その後、他のトレーナとも相談し、号令は廃止した。

もうひとりの R さんは在日 3 世。彼の名前をみれば、すぐに韓国系と分かる。研修も進み、配属まで残り 1 週間となった 7 月上旬、K さんはトレーナ室にやって来た。そして開口一番、「桜井トレーナ、きょうから私を山本と呼んでください」と言った。その意味を、私はすぐ理解した。彼は韓国の名前を捨てたのである。たぶん、その名前であるがゆえに、過去にいじめや差別を受けてきたのであろう。そこで、配属先に赴く前に、名前を変え、新しくスタートしたかったのだ。

S さんも R さんも、広義に言えば日本の風習を、狭義に言えば X 社の社風を、時には反発し、時には受け入れながら、さまざまに悩み、長い歳月をかけ、日本の市民として生きていくのであろう。

よき「市民」となることの意味

ワイマールで出会った若夫婦、そして W さんや S さんや R さんを通して、よき「市民」となることの意味を考えてしまう。

移民が移民先で信頼を勝ち取り、根を張っていく様と、宗教が他国に広がっていく様には、共通点があるのではないかと思う。2016 年春、『変革期イスラーム社会の宗教と紛争』を読んでいたら、編者の塩尻和子氏は、「あとがき」でこう書かれていた。

“オックスフォード大学のターレク・ラマダーンは、ヨーロッパに住むイスラーム教徒に対して、移住し共存して住む運命にある土地・国家・都市への忠誠を守ることを要求し、よき「市民」となることが重要であると主張している。”(401 ページ)

この言葉に賛成だ。

宗教は、それ自体が信仰者のアイデンティティーであり、安心をもたらす。しかし、信仰者の信条を侵されることを拒否する心が、他者を隔てることにつながり、やがて対立を生む。大切なのは、自らの信条と相反しようとも、相手に真摯に向き合い、対話する努力だと思う。そして、対話によって、自らの信条に起こるかもしれない変化、つまり新しい発見や思想の修正を受け入れようとする勇氣も必要だ。そうした努力によって社会と融合し、社会に貢献し、よき「市民」となり、そしてまた、それを成し遂げた宗教こそが、多くの他の人々に受け入れられるのだと思う。世界宗教といわれるようになるには、そうした長い長いプロセスを経る必要があるのだと思う。

私は、このことをドイツ SGI のヴィラ・ザクセンやワイマールで出会った若夫婦から学んだ。

4. カンボジア再訪

2016 年 1 月上旬、家族を連れて 6 日間のカンボジア旅行に出かけた。2008 年に続いての再訪。ベトナム航空を利用し、行きはホーチミン経由シェムリアップ、帰りはハノイ経由。目的は、同年 3 月 5 日に予定されている社会総合研究所主催の石澤良昭氏（上智大学元学長 現アンコール遺跡国際調査団団長 2017 年にアジアのノーベル平和賞と称されるマグサイサイ賞を受賞）による講演「カンボジア人による カンボジアのための アンコール・ワット修復」に先立って、再度、アンコール遺跡を見ておきたかったからである。



石澤良昭氏と私の妻。
3 月 5 日、上野の東京文化会館で講演会を開催した後、居酒屋での懇親会にて。

8 年前に訪れたシェムリアップ空港ターミナルは国内線専用となり、新たに国際線ターミナルが完成していた。以前のひなびたのどかな空港が好きだったが、それは旅行者の勝手な考え。市内は、以前と比べ車で溢れ、ホテルも目立って増えた。しかし、観光による経済的潤いは、ベトナム・中国資本の企業に吸い取られ、カンボジア自体に還元されることは少ない。

今回の旅は、定番であるアンコール・ワット、トム以外に、これまで訪れたことのないタイ国境に近いバンテアイ・チュマールにも行くことにしていた。私は、もちろん、クメール語はまったく分からないので、日本語を話すカンボジア人の通訳兼ガイドを雇った。乾期の観光シーズンなので、アンコール遺跡群は多くの人々で混雑していた。前回の静かな雰囲気はまったくなく、失望した。

ここ数年は中国からの観光客が激増。廃墟であったとしても神聖であるべき寺院で不愉快な行動を取る中国人が多いと言って、ガイドは憤慨していた。アンコール・ワットでは、第三回廊の急斜面を登り、中央塔から遺跡全体を見渡すことができた。上智大学の国際調査団が主体となって修復が進むバンテアイ・クデイ遺跡、そしてこの遺跡で発掘された仏像などを展示しているシハヌーク・イオン博物館にも行った。

4 日目。アンコール王朝最盛期の 12 世紀にジャヤヴァルマン七世が、子どもの死を弔うために建立した仏教寺院バンテアイ・チュマールを訪れた。シェムリアップからタイに通じる国道 6 号線を北西に 110Km 進み、シソポンから国道を離れて北に 50Km ほど悪路を進んだ田舎に寺院遺跡はある。道中の車窓から、地平線まで広がる水田、野菜やアヒルを市場に運ぶ村人たち、庭先にキャッサバを干す光景などを垣間見ることができ、飽きることがなかった。

バンテアイ・チュマールまで来る観光客は、ほとんどいない。この日は私たち 4 人とガイドと運転手、遺跡に興味をもつシェムリアップ在住の日本人青年の計 7 人。遺跡周辺は地雷の除去が進まず、地元ガイドの付き添いが必要であれば危険な場所である。近くには大きな沼地が点在し、あちこちで紅蓮の群生を見かけた。遺跡は、アンコール・ワットのような修復が進まず、ほとんど廃墟そのもの。有名なタ・プローム遺跡のように、樹齢数百年のスポアン（榕樹）の巨木にからめ捕られた寺院も多い。それが私には魅力だった。ガイドによれば、ここは上座部仏教を弾圧したポル・ポトの勢力が強かった地域のひとつで、寺院の破壊、盗掘、地雷埋設が悲劇的に多かった。ポル・ポト政権時のカンボジア人犠牲者は、研究者によって異なるが 80 万～230 万人と推定されている。臆することなくガイドに尋ねると、祖父母や親戚に犠牲となった方が数人いた。

夏空の下、風に吹かれながら、倒壊した石に腰かけて往時を偲んでみた。近くで名も知らぬ小鳥がさえずっている。のどかだ。遺跡は近くに住む子ども達の遊び場。元気に遊ぶ声が響く。廃墟まで来た私たちが珍しいのか、近寄ってきた。私はリュックにあったクッキーを取り出し、みなで分け合って食べた。



バンテアイ・チュマールの巨大な寺院の廃墟はいまにも崩れそうであるが、ここで地元の子ども達が元気に遊んでいた。

最終日の午後、ホテルから家族でトゥクトゥク（三輪タクシー）に乗って、シェムリアップ中心部にあるハンディキャップ・センターを訪問した。付近には、州立病院、赤十字、孤児病院など、医療関係の施設が多い。



トゥクトゥクに乗ってシェムリアップのハンディキャップ・センターへ行く。
 トゥクトゥクは、2人用または4人用の座席車を取り付けた三輪タクシー。「トゥクトゥク」と音を立てて走ることから、この名前が付いたと言われている。

実は、8年前に妻と一緒に市内を散策していたとき、偶然見つけたのが、このハンディキャップ・センターだった。このセンターは、地雷で四肢を失ったり損傷したりした子どもからお年寄りのリハビリをする施設で、犠牲者自らが自分の義足・義手を作る小さな工房も持っている。こうした施設は、カンボジア全土に13か所あるという。前回は、施設管理者の好意に甘えて施設内部を見学させていただいた。病棟には、数十人分の簡素な、というよりは粗末なベッドやリハビリ機器が並び、壁にはおびただしい数の犠牲者の写真が貼ってあった。私と妻は、正直に言えば、強い衝撃を受けた。そして、わずかながら寄付をさせていただいた。

今回のカンボジア行きには、このセンターを再度訪れたいという動機もあった。そして、10歳になる孫娘には、理解できなくても、戦争の悲惨さの一面を見せておきたい気持ちもあった。施設管理者や休息場にいた障害のある方々に挨拶。英語⇄クメール語の通訳は、私たちの訪問目的を知ったトゥクトゥクの運転手の青年が自発的に担ってくれた。そして、少額を寄附箱に入れておくつもりだったが、管理者は、ささやかでも贈呈式をやりたいと言い出した。そこで妻から管理者に渡してもらった。



ミニ贈呈式の後。右端が施設管理者。中央の黒シャツの方は、地雷で左脚を失った。後方の壁には、センターで作った歩行補助具や子ども達が義足でサッカーするポスターが見える。

今回の旅は、観光客が滅多に行かない遺跡見学、田舎のあばら家同然の食堂で恐る恐る食べた地元料理の昼食、フランスによる植民地時代から続く五つ星レストラン Le Grand で値段を気にしながら

ら食べた宮廷料理、映像とレーザービームとアップサラ・ダンスの混じりあったアンコール王朝の歴史劇「Smile of Angkor」の鑑賞、そしてハンディキャップ・センター再訪など、思い出多き旅となった。

(次月号に続く)